成分名	イブシロン-アミノカプロン酸
英文名	ϵ -Aminocaproic Acid
CAS No.	60-32-2
収載公定書	局外規 EP USP
A TOXNET DATABASE へのリンク	https://chem.nlm.nih.gov/chemidplus/rn/60-32-2

投与経路	用途
眼科用剤	緩衝剤
経皮	

1. 単回投与毒性

該当文献なし

2. 反復投与毒性

該当文献なし

3. 遺伝毒性

該当文献なし

4. 癌原性

該当文献なし

5. 生殖発生毒性

ウサギの妊娠初期(妊娠 1~5 日もしくは 1~9 日)に ϵ -アミノカプロン酸 (EACA) の 357 mg/kg/日(4 回に分けて投与) を経口投与し妊娠 10 日に検査した結果, 着床率, 胚・胎児数及び大きさに EACA 投与の影響は認められなかった。1) (Andrade et al. 1978)

6. 局所刺激性

該当文献なし

7. その他の毒性

ϵ -アミノカプロン酸の 1, 2 及び 5 mg/kg を人工脳脊髄液としてラットの側脳室内に投与した結果, 中枢神経系の抑制が認められた。発現した症状として, 自発運動の低下, ヘキソバルビタール誘発睡眠時間の延長, カタレプシーが観察された。 ϵ -アミノカプロン酸の 1 及び 2 g/kg の腹腔内投与では, 抑制性の症状は認められなかった。これらの結果から, ϵ -アミノカプロン酸は血液脳関門を通過し難いことが推察された。いずれの投与経路においても, ペンテトラゾール及びストリキニーネ誘発痙攣に対する ϵ -アミノカプロン酸の作用は認められなかった。2) (Szurska, 1971)

8. ヒトにおける知見

① 血圧低下, 徐脈, 不整脈の発現を防ぐため, 急速静注は避けなければならない。3) (Gilman et

al. 1980)

② 動物において催奇形性が報告されているので、ヒトの妊娠 2 期までの使用は避けなければならない。残りの妊娠 3 期においては、緊急の場合にのみ使用可能である。⁵⁾ (Osol, 1980)

③ DIC 患者に投与すると、重篤な、もしくは致死的な血栓形成が発現する可能性がある。フィブリン溶解性の出血に使用する場合は、潜在的な DIC がないことを確認した後に使用するべきである。¹⁾ (AMA, 1980)

引用文献

1) American Medical Association, AMA Department of Drugs. AMA Drug Evaluations. 4th ed. Chicago: American Medical Association, 1980., p. 1110.

2) Andrade ATL, Shaw ST, Guerra MO and Aaronson DE: Effects of epsilon-aminocaproic acid on fertility in the rabbit. J Reprod Fert 52, 261-264, 1978.

3) Gilman AG, Goodman LS and Gilman A (eds.): Goodman and Gilman's The Pharmacological Basis of Therapeutics. 6th ed. New York: Macmillan Publishing Co., Inc. 1980., p.1362

4) Grant WM: Toxicology of the eye. 2nd ed. Springfield, Illinois: Charles C. Thomas, 1974., p.114.

5) Osol A (ed.): Remington's Pharmaceutical Sciences. 16th ed. Easton, Pennsylvania: Mack Publishing Co., 1980. p.771.

6) Szurska H: Effect of epsilon-aminocaproic acid on the central nervous system of the albino rat. Diss Pharm Pharmacol 23: 1-7, 1971.